

らもありませう、然し私は女であるから、君をおきて男はな
い、君をおきてまは^ッけない、どうぞ逃げずにおやめ下さいまし
二人で仲よく暮しませう

と、否之れ處でない、もつと強い意味の歌をお歌ひになつたの
で仲直りが出来たとか。薄の話が飛んだ横道へそれたから又元
へもどる。

薄は古代から屋根を葺く料とし使はれてゐる、山村の茅屋は非
常に趣味のあるもので、殊に薄の穂が白く靡いてゐる中に、一
軒の農家があつて、軒端には柿の葉が紅葉して、金色の果實が
秋の夕日に照され、後の雑木林には鯛が鳴いて居る等は丹波等
に多い景色であるが、自分ほ之れが純日本の風景であらうと
思ふ。

晩秋の野は實に荒涼たるものである、稻田は刈られ、美しかつ
た花も枯れ、落葉樹の葉は落ち盡して、鳴く虫の音も何となく
憐れに聞える、梢を鳴らす木枯の風が、蕭々として尾花の上を
渡る時、ああ此時こそ眞に淋しみを感ずる時である。(九月十五日)

日本水彩畫會新會友

徳島縣川島町八七〇

福岡縣柳川町瀬高町二九

静岡縣富士郡大宮町

中 高 一

富 安 道 義

石 井 眞 峯

寄 書

飯山素絢畫會記錄抄録

明治四十年五月五日同志二三と語りひ水彩畫の研究を目的とし
スケッチ會なるものを組織し、同日森本香谷氏の寓居に於て發
會式を舉行せり、爾來入會者續々申込ありしを以て、研究所を
飯山中學校圖畫室に移し、左の内規を定めたり

一會員、中學生の入會者にありては三學年以上の者たるべきと

一會期、毎月第一、第二日曜日に開會し午前は主として靜物の

寫生をなし、午後は郊外の寫生とし、隨時作品の互評會を開

くこと

以上の各項を議定し、次て幹事の互撰を行へしに、岡登貞治、
石田次郎の二氏當撰せり、同日入江木堂氏の撰定を請ひ、會名
を素絢と命ず。

同年九月廿七日より二日間、本部教育品展覽會開催を機とし、
會員の作品八十余點を陳列し、こゝに第一回繪畫展覽會を開き
たり。

四十一年三月廿五日、幹事岡登貞治氏は美術學校に、同石田次
郎氏は早稻田にいつれも入學上京に付、本會外部會員とし、市
川淨、小林重治の二氏代て幹事に就任す。

同年五月三日、本會創立一周年紀念會を圖畫室に開き、内外會
員の作品四十八點、參考として丸山晚霞氏の作品數點を陳列し
來賓の觀覽に供せり。